

オリンピックスポーツ文化研究
2019.6 No.4 165—168

研究報告
(研究プロジェクト)

メダリストへの軌跡 —太田拓弥—

太 田 拓 弥

【経歴】

1992年3月 日本体育大学体育学部体育学科卒業
1992年4月 日本体育大学体育学部体育学科助手
1994年4月 霞ヶ浦高等学校保健体育教諭
1998年4月 和歌山県教育委員会保健体育課体育指導員
2000年4月 早稲田大学レスリング部専任コーチ
2005年4月 NPO法人ワセダクラブレスリング指導員
2010年4月 早稲田大学レスリング部ヘッドコーチ
2011年4月 ヤマハ発動機ジュビロレスリングコーチ
2016年9月 東京五輪レスリング日本代表中重量級コーチ
2017年4月 早稲田大学レスリング部専任監督

【競技歴】

1994年 世界選手権大会 フリースタイル 74kg 級 第6位
1994年 広島アジア大会 フリースタイル 74kg 級 銀メダル
1995年 世界選手権大会 フリースタイル 74kg 級 第7位
1996年 アトランタオリンピック フリースタイル 74kg 級 銅メダル

1. 競技との出会い

幼少の頃から身体を動かすことが好きだった私は、小学4年生から自宅近くの柔道教室に通い、中学でも柔道部に入部するが、活動が週3回程度しかなく、土日にも練習はない中、週末違うスポーツをやってみたいと思っていたところ、地元の高校でレスリング教室が開校される話をきいて、早速申し込みレスリングを始めることとなった。

柔道とは違い掴むところがなく、低く構える姿勢や掴みどころのない競技に難しい競技だなと感じていた。しかし、徐々に慣れ高校生からポイントを取れるようになりレスリングに魅力を感じる

ようになっていった。中学を卒業し、地元の和歌山県新宮高校に入学しレスリングを続けようと思い受験することとなった。甘い考えでいた私は、「何とかなるだろう」と思い受験し不合格となった。

人生の転機はここから始まったと、今でも思っており、このことがきっかけで妥協しないところや、見返してやろうといった気持ちを今でも常に持ち続けている。

地元の高校受験に失敗した当日、父親が大阪で単身赴任していたが、私の不合格を聞いて、帰省し、私に会うなり、「茨城の霞ヶ浦高校でレスリングをやりなさい」と一言。それを聞いた私は、

その手段があったかとすぐに受験の準備をして2日後には、霞ヶ浦高校を受験し合格。地元に戻り荷造りして、霞ヶ浦高校レスリング部合宿所に入寮することとなった。

当時霞ヶ浦高校レスリング部は、全国優勝はないものの全国トップクラスのチームであった。入部した時は、全くレスリングを理解しておらず、同級生はレスリングの全国チャンピオンや実力者が多く全く歯がたたなかった。とにかく練習についていき、必死に食らいついていった。そして、徐々に実力がつき2年生でレギュラーを獲得、春の選抜では団体優勝を後一步で逃し、インターハイでは必ず団体優勝を目標とし強化練習として、1日4回8時間の練習をした。また、夏のインターハイがあるため、酷暑特訓として6月以降は道場内を締め切り、そこにボイラーをたいて暑さ対策をした。その効果があり、岡山で開催されたインターハイでは、暑さは気にせずのびのびとレスリングができ、創部してはじめて団体優勝し、個人戦でも8階級中6階級を制し、まさに霞ヶ浦旋風を巻き起こした。

2. 日体大での思い出（選手生活の思い出）

1988年4月に入学した。当時は、日体大レスリング部の全盛期であり、東日本リーグ戦、大学選手権、フリー王座決定戦、大学グレコローマン選手権といった4つの大きな団体戦を常に優勝しているチームで4つタイトルをとるのが当たり前であった。

恩師藤本英雄先生の口癖は、そんな国内の団体戦で勝つより「世界で勝つ」であった。入学したその年は、ソウルオリンピックの年であり、大学OBで助手であった佐藤満先生が金メダルを獲得。その大会には日体大OBが7名出場するなど、世界で活躍する選手を育成するレスリング部であった。そのような伝統あるレスリング部に入部し、先輩に影響を受け、大学2年次に大学チャンピオンになった。

大学時代の1番の思い出の大会は、やはり東日本リーグ戦である。大学4年次は主将に任命され、その大会は12連覇中であり、相当なプレッシャーの中、戦ったのを今でも鮮明に覚えている。当時の強豪校は、日本大学、国士舘大学であり、後輩の活躍もあり何とか13連覇を達成した。

そして、大学4年次は、バルセロナ五輪の予選の年であったが、あえなく国内予選で敗退。しかしながら、同級生や先輩が代表を勝ち取り7名の代表を輩出した。身近な世代の選手が代表となり嬉しい反面悔しい思いをした大会であった。

3. オリンピックでのメダル獲得

1993年カナダ・カルガリーで開催された世界選手権大会で、日本チームが惨敗した為、翌年7月、代表コーチに世界8回優勝経験のあるロシア人コーチのセルゲイ・ベログラゾフ氏を招聘、世界トップクラスの技術を指導していただいた。私はその年に初めて日本代表に選出され、1994年8月トルコ・イスタンブールで開催された世界選手権大会で6位に入賞、10月広島で開催されたアジア大会では銀メダルを獲得。世界で勝てる自信がついた年であった。

1996年4月、中国で開催されたアトランタオリンピックアジア予選に出場、その当時のルールは国内大会で優勝し代表になり、アジア予選4位以内で代表権獲得であった。大会では1回戦の対戦相手は、バルセロナ五輪金メダリスト韓国の選手であった。

0-4判定で敗戦。敗者復活戦にまわった。文字通り負ければ最後の試合が続き、敗者復活1回戦台湾選手に判定勝利、敗者復活2回戦モンゴル選手に判定勝利、そして、敗者復活3回戦では、1年前W杯で対戦し負けたウズベキスタン選手であった。序盤、投げ技、タックルを決められ0-4とリードされるも、とにかく最後まで諦めないで全ての力を出し尽くそうと思い試合に挑んでいた。そして、対戦相手が徐々にスタミナが消費し

逆転で勝利し代表権を獲得した。

そして、迎えた本番のオリンピック。夢にまで見た最高の舞台で、とにかく、全ての力を出し絶対諦めない試合ををすると思い、シングレットの中に入れるハンカチには「全力」と刻み試合に挑んだ。1回戦と2回戦の対戦相手は、前年世界選手権で対戦した、ブラジル、ベラルーシであり、前年同様勝利することができた。3回戦では、前回大会金メダリストの韓国選手であった。序盤からグランドでかえされ、0-5で敗戦。この試合の負けにより敗者復活戦にまわった。敗者復活1回戦ではマケドニア選手に判定勝ち、敗者復活2回戦ではモルドバ選手に0-4とリードされたものの、同点に追いついて、延長戦でタックルを決めて勝利。そして、敗者復活3回戦では地元アメリカの選手であった。この選手は世界選手権優勝3回、ソウルオリンピック金メダル、バルセロナオリンピック銀メダルといった世界のトップに君臨している選手で、オリンピック半年前のブルガリア国際大会で対戦した際は0-4で敗戦した。この時に対戦した際に、試合開始早々飛行機投げをかけられ3点を先取されていたので、開始早々の攻撃を注意し、警戒していたこともあり最小失点におさえ、5分の試合時間終了では0-2と負けていた。この当時のルールで同点もしくは3点獲得していなければ3分の延長戦といったルールであり、3分の延長戦に入った。なかなかポイント獲得のチャンスはなかったものの、6分過ぎバックにまわり1点獲得、1-2でラスト1分、タックルとローリングの攻撃をしかけ4-2で逆転勝利し3位決定戦に進んだ。

そして、迎えた3位決定戦。それまで日本男子レスリングは、4位が最高の結果となっており、私が敗退すれば、ヘルシンキ大会から続く連続獲得メダルが無くなる場所であった。しかし、当の本人は、そういった危機的状況は分かっておらず、「メダル獲得すればヒーローになれる」といった気持ちで試合に挑んだ。とにかく、自分を信じて、今までやってきたことを最後まで諦めないで

全力を出し尽くすことを考えていた。

試合では、序盤0-2とリードされるが、タックル、ローリングとポイントを重ね逆転、相手もしぶとくポイントを取り3-3同点。5分の試合時間は経過し延長戦へ。最後の力を振り絞りタックルを決めて銅メダルを死守した。

アトランタオリンピックでは、前述している通り、最後まで諦めないで全力を出す事ができた内容であった。それは、常日頃の練習から心がけていたことでもあり、また、高校時代・大学時代の団体戦で、自分が負ければ団体優勝できないといった状況を経験していることが生きた試合でもあった。

4. その後の人生

1996年アトランタオリンピック後、12月全日本選手権大会で引退したものの、現役に対する思いが湧き、1998年6月現役復帰した。その当時、和歌山県には体育指導員制度といった、主に国民体育大会で入賞を目的としている—いわゆる国体要員のような制度で現役を続けることとなった。その制度で入庁しているメンバーと週4回の朝練習と週6回の実践練習を行った。その練習には和歌山工業高校のレスリング部員が加わっており、そのメンバーの中にその後北京オリンピックで銀メダル、ロンドンオリンピックで銅メダルを獲得した双子の湯元進一・健一選手と一緒に練習を取り組んでいた。

そして、1999年12月シドニーオリンピック国内予選に出場したものの準決勝で敗退した。

2000年の和歌山県庁在職時代、当時の早稲田大学レスリング部OB会長と監督から、早稲田大学レスリング部を立て直してほしいと要請があり、2001年4月より、引き受けることとなった。コーチ就任当初は、部員数も少なく、意欲的な学生が少なく不信にあえいでいたが、早稲田大学人間科学部スポーツ学科からスポーツ科学部となり、推薦制度の見直しにより、毎年2・3名の学

生を確保することができ、徐々に結果を残せるようになった。コーチ就任7年目で悲願であった学生フリー王座決定戦で初めて日本一となり、その後、東日本学生レスリングリーグ戦優勝2回、全日本フリー王座決定戦優勝2回、内閣総理大臣杯全日本大学選手権大会優勝1回と強豪チームの仲間入りを果たした。日本代表選手も延べ人数10名を超えたものの、コーチ就任当初より目標としているオリンピック代表・メダリストの育成には至っていない。東京オリンピックでは必ず本学レスリング部員・OBが代表になり、東京オリンピックでのメダル獲得を目指している。また、2017年9月から東京オリンピック日本代表中・重量級フリースタイルコーチとして、代表選手の強化にも携わらせていただいている。

2011年4月～昨年3月まで、ヤマハ発動機ジュビロラグビーチーム清宮監督からの要請でコーチとして、ラグビー選手にレスリングの練習を取り入れたいと打診があり引き受けることとなった。主に毎週月曜日・火曜日朝6時～3グループに分けて、ラグーマンにレスリングの練習の指導にあたった。コーチ就任4年目には、日本選手権で優勝を果たすことができた。

また、2005年7月より、地域の子供達を対象としたレスリング教室を立ち上げると同時にダウン症児・自閉症児の子供達を対象としたレスリング教室を開校した。この教室は、障がいをもった子供たちに身体を動かす機会を作るため立ち上げた。今現在の在籍数は20名を超え、京都八幡・神奈川大楠・福島いわきにも同様の教室があり、年2回大会を開催している。

5. 後輩に一言

中学時代、受験に失敗した私は「全力で取り組む」「絶対諦めない」ことを学んだ。それまでの私は、何事も中途半端で投げ出しており、「何とかなるわ」といった軽い気持ちでいた。しかし、この受験の失敗から、最後まで諦めずに全力で取り組むことの大切さを学び、それからはレスリングの練習で妥協しなかった結果がオリンピック銅メダルに結びついた。

今日に至るまで、幼少時代・高校時代・大学時代・全日本時代に多くの仲間を支えられてきたので、人間関係の繋がりや仲間の大切にする生き方をしてもらい、最後まで諦めない気持ちと仲間を大切にすること2点を若い世代に伝えたい。

